

1995 年度学会賞受賞作品・授賞理由

◆計画設計賞恵比寿ガーデンプレイスにみる大規模土地利用転換による都市複合空間形成への取り組み

受賞者代表 枝元 賢造(サッポロビール(株)代表取締役社長)

〈選考理由〉

本作品は、東京の中心部の一角において、大規模土地利用転換による複合型都市機能空間を実現し、成功をおさめ、今後の都市開発のモデルをなしたものである。とくに受賞者は、初期の段階からこの事業の都市計画的な位置づけを認識し、一民間企業の単なる工場跡地開発にとどまることなく東京の中心地区にふさわしい都市空間のありかたを模索し、その実現に向けて十数年におよぶ努力を重ねて来た。

本作品の評価される点を挙げれば、まず第一に、受賞者が、道路をはじめ各種の公共施設と民間の敷地開発との、公と民の領域の積極的な統合を果していること、第二に、大規模開発と周辺市街地との調整をなしているだけでなく、周辺の街並みと一体となった新たな都市景観の創出をはかっていること。さらに第三に、JR恵比寿駅との関連など、新しい交通環境の形成を果していること、また第四に、複合開発における一体的な都市経営モデルを実現したこと、第五に、都心居住への貢献をなしていることである。

要するに、受賞者は、多くの外部の専門家・機関などの協力を得ながらも、開発企画、設計、事業を相互に密接に連携させながら業務を遂行し、事業を成功に導いた。よって、本作品は計画設計賞に値すると考えた。

◆論文賞都市開発における水循環再生システムの構築過程と総合化に関する研究

松田 慎一郎((株)みなとみらい開発センター代表取締役社長)

《選考理由》

大都市郊外部を中心に都市開発を推進するうえでの大きな隘路は、都市開発の事業スケジュールに河川事業が即応できないことであった。

本論文では、住宅・都市整備公団という開発主体を、河川管理者と新住民との中間に位置づけ、その行ってきた対策を「問」を「補う」という意味から、「補間システム」と規定した。このシステムは、当初は単に治水対策であったものが、保水、利水対策、低水対策、環境対策と、より高度、高意義の「都市開発における水循環再生システム」として発展してきたことを述べ、それを、財源、体制、施設の面から対応措置の形成過程を分析し、都市開発事業にとっての導入意義や効果を事例検証を行うことにより、その有効性を論証している。さらに、総合的な「水循環再生システム」へ発展させる必要性を提示し、複数のモデル地区におけるシステム構築過程を分析することにより、その可能性を論証した。また、このシステムが一般市街地での適用の可能性も示唆した。

本論文の特徴は、筆者が公団でこれらのケースで実際にその事業を担当し、開発事業、河川整備事業に精通した結果得られた知見、経験に裏付けられた秀れた成果である。また、学術と実践の両面から分析し、計画論としても総合的視点からまとめた優れた論文でもある。よって本論文が論文賞に値すると評価した。

◆論文奨励賞観光開発地域における文化変容と演出設計および景観管理計画に関する研究

西山 徳明(九州芸術工科大学芸術工学部助教授)

《選考理由》

観光活動は、現代社会の余暇生活のニーズに応えるとともに、地域経済の振興に役立ち、また観光地における地域住民と、多様な観光客層との交流を通じて特色ある地域計画を実現させる契機になると考えられる。本論文は従来の需要追従論や資源開発とは異なる視点で、均衡のとれた地域振興に有益な計画論を探究し、独自の地域交流型開発の基礎理論を提示したものである。特に多くの地域交流開発型を進めている内外先進事例を対象に、文献資料と実地調査から、地域特性のイメージ設

計を行い、プロジェクト技法として景観・デザインの継承・創作をする空間設計、モデルカルチャーを媒体とする演出設計、ならびに来訪客の流動・滞在パターンを多様化する誘致設計の三つの側面から実証的研究を行い、それが地域計画技法として有用であることを示した。また伝統的な集落、街並み景観が観光対象となる場合、地域住民の生活空間と開発ニーズとの矛盾がしばしば問題になるが、これらの問題を積極的にとりあげ、保存継承型事例の調査を通じて地域景観管理の計画技法を提示した。以上近年の地域開発のテーマとなってきた、ツーリズム（観光活動）について基礎的に解明し、地域計画の手法と実践的技法を構築したことは都市計画研究として高く評価できるもので、本学会論文奨励賞に値すると判定した。

◆論文奨励賞都心商業地域における駐車政策分析モデルに関する研究

室町 泰徳(東京大学大学院工学系研究科講師)

〈選考理由〉

衛星都市中心地区、地方都市の中心商業地区等において短期的に公共駐車場等の整備が望めない場合には、駐車場不足を補うために既存駐車場の有効利用を図る必要がある。そのような地区内でのドライバーの駐車場選択行動、とくに駐車時間を考慮した駐車需要と供給の均衡問題を扱うモデルについては十分なものがなく、理論的な検討には限界があった。

本論文では、駐車場利用実態調査を行ない、駐車場選択モデルを構築し、これに基づき、駐車需要特性、駐車場容量制約を考慮したシミュレーションによりドライバーの駐車場利用を説明し、良好な適合性を得たことを述べている。また予測モデルとして各種の駐車対策例えば、公共駐車場容量の整備、料金システムの改善、案内誘導情報の提供等の駐車政策要因を導入した分析と予測が可能となり、モデル分析の可能性を大きく拡張したことを述べている。さらに具体的なケーススタディを実施して、都心商業地区において駐車場案内システム、駐車料金システム、公共駐車場整備等の政策変数を変動させることによる駐車政策の評価と駐車行動および駐車場利用の効率、パフォーマンスの変化を予測し、これらにより駐車場選択の幅や駐車時間などの面でドライバーに与える影響を数量的に評価できることを示すなどの興味ある結果を得ている。

以上の成果は、限られた範囲ではあるが、駐車問題の分析にいくつかの政策変数を導入できる実用性の高いモデルを開発したものであり、交通計画、都市計画分野の発展に寄与するものといえ、本学会の論文奨励賞に値するものと評価した。

◆論文奨励賞近世城下町を基盤とする地方都市における第2次世界大戦前の都市計画

野中 勝利(長銀総研コンサルティング副主任研究員)

《選考理由》

本論文は、近世城下町であった地方都市をとりあげ、第二次世界大戦前および戦中期の法定都市計画の方法論の解明とその評価を試みたものである。

具体的には、59の城下町都市を対象にして、過半数の都市で取り入れられた都市計画街路、都市計画区域、風致地区の実態分析作業を試みており、これまであまり明らかでなかった地方都市の戦前の法定都市計画の実情を明らかにするとともに、個々の都市がそれぞれ固有の条件を生かし、法定都市計画の手段を用いて、近代都市としての骨格を形成していく過程を明らかにしている。また、近代の都市機能の整備のために、法制度的裏付けをもって初めて都市の全体像へアプローチし、都市空間デザインの萌芽ともいえる実践が各都市でなされていたことを明きらかにしている。

以上のような一連の研究成果は、わが国の近代都市計画を再評価し、新たな方法論を構築するうえで極めて重要な知見を提供しており、本論文は論文奨励賞に値すると思った。